

川崎ワークショップを開催しました！



3月3日土曜日に神奈川県川崎市おでんせ中の島で「川崎ワークショップ 高齢者グループリビングの社会的普及に向けた実践的調査研究報告会」（特定非営利活動法人暮らしネット・えん主催、グループリビング運営協議会共催）とおでんせ中の島の見学会を開催しました。

グループリビング運営協議会会員の研究者や実践者8人が首都圏を中心に全国12ヶ所の高齢者共同居住の運営者と潜在的運営者を対象に調査を行い、その事例報告と研究発表を行いました。

参加者は総勢32名で、グループリビング運営者、スタッフ、居住者、グループリビングを作りたい人、グループリビングに興味のある人、研究者等が集まりました。

この研究は3年計画で実施しており、その2年目が終了しました。今年度は最終年度となるため、3月にシンポジウムを行う予定です。

2017 年度川崎ワークショップ 講演内容

事例報告・研究発表

| 発表順 | 内容 | | 発表者 |
|-----|------|--|--------|
| 1 | 研究発表 | じゅげむ館きたみ | 宮野 順子 |
| 2 | 事例報告 | ゆめみぐさ | 近兼 路子 |
| 3 | 事例報告 | COCOせせらぎ | |
| 4 | 事例報告 | おでんせ中野島 | |
| 5 | 研究発表 | 運営者と居住者の関係 | |
| 6 | 事例報告 | グッドタイム リビング なかもず | 中西 眞弓 |
| 7 | 事例報告 | グループリビングかなで | |
| 8 | 研究発表 | グループリビングと多世代居住に関する一考察 | |
| 9 | 事例報告 | わかば館 | 土井原奈津江 |
| 10 | 事例報告 | グループリビング ルピナス | |
| 11 | 事例報告 | 音更町ふれあい住宅 | |
| 12 | 研究発表 | 運営主体のベースの共同性 | |
| 13 | 事例報告 | 荻窪家族レジデンス | 林 和秀 |
| 14 | 事例報告 | コスモスの家 | |
| 15 | 研究発表 | 高齢期の「住まい」と「ケア」の一提案 | |
| 16 | 研究発表 | グループリビングで介護が必要になったとき ～グループリビングえんの森の場合～ | 小島 美里 |
| 17 | 事例報告 | ゆいま～る厚沢部 | 大江 守之 |
| 18 | 事例報告 | ゆいま～る高島平 | |
| 19 | 研究発表 | 民間事業者の新たな参入 | |

委員会メンバー（アイウエオ順）

| | |
|---------|---------------------------------|
| 上野 勝代 | 神戸女子大学 名誉教授 |
| 大江 守之 | 慶應義塾大学 名誉教授／NPO 法人 COCO 湘南 理事長 |
| 小島 美里 | NPO 法人暮らしネット・えん 代表理事 |
| 近兼 路子 | 慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程 |
| 土井原 奈津江 | 慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員 |
| 中西 眞弓 | 神戸山手短期大学生活学科 准教授 |
| 林 和秀 | NPO 法人暮らしネット・えん職員／立教大学大学院後期博士課程 |
| 宮野 順子 | 京都光華女子大学短期大学部 講師 |

ワークショップ参加者のご感想やご意見

様々な事例の勉強させていただきました。全国的な規模の研究で、地域によっていろんな工夫があって、そのプロセスにおいて核となる人材の情熱が大きな支えとなっていると感じています。勉強になりました。私自身は地域とのつながりの部分に関心があります。(NPO 法人)

グループリビングの地域、自由、在宅の理念に大変関心がありますが、有料老人ホームとの区別が一般の方にはわかりにくく残念です。大いにマスコミ等で普及していただきたいと思います。たくさんの報告、研究をお聞きし有意義な時間でした。(グループリビング支援者)

グループリビングも実にいろいろな形があるのですね。盛りだくさんの報告でちょっと消化しきれない感じです。(グループリビングをつくりたい)

テーマを絞った研究展示で、発表に興味深いものがありました。お聞きしたい内容があったと感じました。私の場合は1番目と2番目の発表者のものでした。

介護の専門家、地域活動の専門家が運営しているケースが活発な活動を行い、継続していると言うことで、その知見、方法をアドバイスして、他の立場の方たちが共有しようとする場になっているように感じました。運営の仕方によっては、経営上のリスクがあることを認識しました。

認知症居住者等のことをどう考え対処していくかが問われていることがわかりました。

助け合いながら暮らすという価値観の下に集まっているのがグループリビングだと言うふうに解釈したら良いのかなと思いました。(NPO 法人・グループリビングに興味がある)

もう少しゆっくりとひとつひとつの報告を聞きたいと思いました。報告書を楽しみにしています。地域との連携、つながりを持つことの大切さ、それがないとグループリビングの暮らしは成り立たないことがよく伝わりました。開設当初は自立度の高い方が共に暮らすのが、年月が経てば介護、支援が必要になるので、その受け皿が必要になると感じます。継続の難しさを感じています。(NPO 法人・グループリビングに興味がある)

調査した人の生の声を聞くことができよかった。荻窪家族レジデンスの事例では、14人中4名入居と言う厳しい現状を認識できた。実際に運営するときの手がかりが得られました。(一般・グループリビングをつくりたい)

多くの研究者の発表を聞かせていただきました。大変勉強になりました。様々な研究対象、様々な研究方法があることがわかり、自分の研究の参考になると思います。ありがとうございました。(学生)

グループリビングの実情を学べてよかったです。シェアハウスと言う形で検討していますがもっと地域交流について勉強する必要確認できました。周りの人を巻き込む方法を考えていきたいと思っています。みなさんのこれまで、これからの努力を道標に住みたいと思います。(理学療法士・グループリビングをつくりたい)

これまでのワークショップとは違った角度の意見や考察が多く聞けて勉強になった。女性が長寿で一人暮らしをする人が多い社会でグループリビングは1つのスタイルだと考える。(大学)

会員紹介

「COCO 下小田」をオープンします！



(一社) 優良中古住宅流通推進協議会
坪内孝介

はじめまして。新会員の（一社）優良中古住宅流通推進協議会の坪内と申します。

グループリビングの理念、普及活動に共感しまして入会をさせていただきました。

諸先輩方に教を請いながら室の高いグループリビング運営と普及活動を目指したいと思います。また、体感からの知識や情報は運営協議会へフィードバックするなど、皆さまへの貢献が出来たらと思います。

私どもの協議会では、空き家対策についての勉強会を開催しておりました。

空き家問題を見ていると、独居状態になった後、劣化が進んで使えない空き家ができるのだと見えてきます。

もし、独居状態になった時点で安心して住める場所が他にあれば、その建物は使える状態で若い世帯に譲る事が出来き、その地域は若返ることも出来ます。

一方、その独居のリスクは将来巨額な社会保障費へと繋がり、それは3人に1人が75歳以上となる35年後にピークを迎えます。その時点で大きな負担を強いられるのは自分の子ども世代となるのです。

空き家問題と独居問題はかなり密接な関係にあることに気づき、その解決方法の一つがグループリビングと考え開設を決意しました。

健康寿命を伸ばし、子ども達に負担をかけない社会にすることが僕の夢であり、それにはグループリビングの考え方を文化とする必要があります。

自分が75歳になる35年後、そんな社会になっているように35年をかけたプロジェクトをスタートさせます。

グループリビング自体の考え方は普及協議会で言っている事そのもので、その理念に大きく共感します。なので、我々の初号館は「COCO 下小田」と名付けさせて頂き、4月7日8日にプレオープンとなります。

運営については全くの素人ですので、皆さまを頼らせて頂くかもしれません。その時はどうか暖かいアドバイスを頂けたら幸いです。

今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

「リビング」と「ホーム」



立教大学コミュニティ福祉学研究科 博士後期課程

NPO 法人暮らしネット・えん 職員

林和秀

私は、立教大学コミュニティ福祉学研究科博士後期課程に在籍しています。大学卒業後に、介護職として特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護、認知症グループホームに勤務してきました。現在は、大学での研究活動と同時に NPO 法人暮らし・ネットえんで認知症グループホームで介護職をしながら、昨年度から JKA 補助事業調査の一端に加わらせていただきました。大学では主に日本の認知症グループホームをフィールドに研究をさせていただいているのですが、グループリビングの調査に関わらせていただく中で、「リビング」と「ホーム」の違いを感じるようになりました。

リビング (Living) とは、生活や暮らし方、生きているという状態を意味します。そして、ホーム (home) とは家庭や生活空間としての「家」という意味合いが強いです。前者は先に住む人たちがいて、その人たちを通して暮らしが形作られるというイメージですが、後者は先に住まいや家庭という枠があって、そこで暮らす人の姿が後から浮かんできます。認知症グループホームは介護保険サービスですので、先に「家庭的な家」がつくられ、そこに認知症の方が入居するということが想定されたのかもしれませんが。また、「このグループホームで暮らしたい」と思って入居する方はほとんどいないのが現実です。一方でグループリビングは、理念に共鳴し、ここで一緒に暮らしたいという主体的な選択の中で、住む人が集まり、暮らしをつくっているところが多いです。認知症グループホームでも、こうした主体的な選択を、入居している人にお返しすることが必要だと感じています。

生活に不安を抱える人たちが、一つ屋根の下で助け合って暮らすグループリビングという「暮らし方」は、多くの人が共感すると考えます。それは、認知症グループホームで暮らす人たちが、ふとしたところで助け合う姿を目にすることが多々あるからです。食器を下げてあげたり、手の届くところは分担してテーブルを拭いたり、愚痴を聴いたり、話したり。もちろん、共同生活ならではのネガティブなこともあります。助け合う姿を肯定的に捉える人も多いのではないのでしょうか。グループリビングのような高齢期の暮らしの場では、いずれ認知症の方への支援の必要性が生まれてきます。助け合って暮らす場でのケアの問題は、時には今までの関係を変えてしまうこともあるかもしれません。こうした、ケアの問題にグループリビングはどのように対応していくのか。たとえ生活に支援が必要になっても、こんな生活も悪くないな、と思えるような「リビング」の提案に繋がるような調査・研究に精進したいと思っています。

神奈川県川崎市中原区の NPO 法人グループリビング川崎は、グループリビング COCO 宮内の運営を行う支援事業者である。サービス内容は、掃除、食事、ライフサポート（生活の細々としたサポート）でいずれもボランティアで行われている。

昨年 8 月川崎北労働基準監督署から「介護労働者に関する労働条件調査の実施について」という書類が事業主宛で送られてきた。書面の調査内容を見ると「雇用契約書・労働条件通知書」、「就業規則」、「時間外労働・休日労働に関する協定届」など、法人では作成していない書類ばかりだった。理事長原眞澄美氏は早速、川崎北労働基準監督署に問い合わせ、スタッフの雇用形態について以下の説明を行った。①一人月 6 回程度と勤務が少なく短時間労働であり、生活のための仕事ではない。②働き方は組織が管理していない。メンバー同士が話し合い決める。③NPO 法人であること、④川崎市安心ハウス交流支援モデル事業である。その結果、労働保険の書類上の「事業または作業の種類」が「グループリビングの運営」から「グループリビングのボランティア運営」に変更となった。家事契約費として入居者から関わった人に支払われる費用は、ボランティアをすることによる「損失補填」になるとされた。ボランティアは労働保険の対象に該当しないため、労働保険料（年間約 6 千円）を支払わなくても良いことが判明した。NPO 法人グループリビング川崎では、これまでボランティア保険も支払っていたため保険料をダブルで支払っていたことになる。

さらに労働保険料の支払いがなくなったことで、会計士に頼んでいた労働保険申告書作成や年末調整及び法定調書給与支払作成が必要なくなり会計士への支払いが約 5 万円安くなる結果となった。

報告書を 4 月末までに 会員の皆様にお届けいたします。

報告書Ⅰ 調査研究編

報告書Ⅱ 研究テーマ・調査報告編



グループリビング運営協議会 会員募集中

グループリビングの暮らし方や運営について、一緒に考えていくことのできる仲間、情報提供してくれる仲間を作りませんか。

■グループリビング運営協議会 連絡先

土井原奈津江

NPO 法人いぶりたすけ愛内連絡先

natsue@sfc.keio.ac.jp



編集委員 小島美里 土井原奈津江